

人間学部社会科学の取り組み

吉 田 正 (人間学部社会科学)

・ユニーク教育の社会科学

現在、社会科学の「特色ある教育」として実施されている事業の原型は、1966年に本学が創設された当初の社会科学創設期にまでルーツをさかのぼることができます。創設以来、社会科学はさまざまなユニークな教育の取り組みをしてきました。

1969年度、社会科学の完成年度に、新たに助手一名(吉田)が採用されてスタッフは4名となり、学生数は約200/名余となりました。その6月に第一回「野外研究授業」が開催され、ハトバスをチャーターして滋賀県朽木村へ出かけました。それは30年後の現在の社会科学のカリキュラムを特色づける「フィールドワーク」の始まりでした。またこの年第一期生が卒業するのを記念して、後輩が「論集作成委員会」を結成し、その卒業論文の中から今後の卒論作成のモデルとなる論文を選んで『社会学論集』を創刊しました。その出版経費は、卒業生ならびに在学生在が自らそれを購入してまかない、やりたいことは自前でやる社会科学学生の心意気を示しました。その後、この委員会は、現在の「社会科学学生委員会」に再編成されました。

1970年度、それまでの文学部心理・社会科学が、心理学科と社会科学に分離し、スタッフは5名となりました。この年の新入生オリエンテーションから、上級生が「オリエンテーション委員会」を結成し、新入生の履修手続きを援助するという活動を開始しました。このオリエンテーション委員会は長く続き、その活動は現在の学生委員会にまで受け継がれています。新入生に対する教員と学生のこのようなかわり方は、本学において今年度から全学的規模で展開された導入教育(「新入生演習」)の試みを先取りするものといえます。

この年の5月に、教員と学生が執筆する『社会学研究ノート』が創刊されました。抽象的な説明になりがちな社会学の考え方を少しでも具体的な事例に即して身に付けようとする学生の意欲の現れでした。その編集過程では自然に学生と教員の関係が親密になり、その雰囲気は学科の教育のあり方に与えた影響は大きいものでありました。それは現在でもゼミ運営や卒論指導のあり方に受け継がれ、いろいろの場所で手軽にパーティが行なわれたり、ゼミ合宿が当たり前のことになったように思われます。

この年の7月には、文部省の科学研究費の補助を受け、広島県福山市の走り島の漁村研究が学生も参加して始まりました。この研究は2年間続き、その後は講義科目「社会調査法」にフィールド調査が不可欠であることが認識され、学科経費として予算化されることになりました。1985

人間学部社会科学の取り組み

年には調査法だけでなく、全ての選任教員の担当科目にフィールド調査は本質的に付随すべきものという考えが認められ、多彩な実習プロジェクトの企画となって開花しました。そのユニークな実習プロジェクトの事例をあげれば、「釜ヶ崎に学ぶ」「盛り場ウォッチング」「雲仙普賢岳被災地を見る」「長良川河口堰問題研究」「姫路難民定住促進センター社会適応訓練体験学習」「何も無い山の中で食寝遊学」「ニュー・メディア体験」「情報探索入門」「スパイダー・ウォッチング」「生命倫理研究会」「情報探索のイエロー・ページを作ろう」などがあります。

1975年、当時最先端の知的生産の技術と評価されていた川喜田二郎氏考案のKJ法（「発想法」・「問題解決学」）の講習会（於鎌倉市ホテル養心亭）に二名の教員（矢谷・吉田）が参加し指導許可資格を得ました（KJ法には特許権があり、無断使用はできません）。その年の夏休み、第1回KJ法移動大学「カマボコ式テントの中から大学を見れば」が兵庫県の廃村跡に作られつつあった分尾キャンプ場において実施され、1年2組の学生約50名が参加しました。更に当時新設されたばかりの「初級演習」（1回生対象のゼミで現在の新入生演習や表現演習に当たる）においてゼミ運営の基本的技法にKJ法を取り入れようという試みがなされましたが、90分という大学の講義時間の枠組みの中に組み込んで実施することはできないことが分かりました。KJ法の技術と精神を正確に伝えるためには、更にいくつかの困難があることも分かってきました。それは、ひとまとまりの討論が収束するまで継続できる時間と隔離された場所が必須の条件であること、グループごとに有能なインストラクターが必要なことです。前者の条件は、当時神戸市北区の山の中に開設されたばかりの関西地区大学セミナーハウスが備えていましたので、傑物の上級生をスカウトしてはインストラクター養成講習会をそこで幾度も開催することになりました。このような努力にもかかわらず、上級生はすぐに卒業してしまいますから、結局、KJ法を社会科学の教育の基本技術として定着させることはできませんでしたが、1992年に実習プロジェクトの一つとして復活し、現在では「特色ある教育」の基本的プログラムとして毎年実施しています。現在のプロジェクト名は「さかさま大学KJ2004」（数字は実施年の西暦年号で毎年変わる）、インストラクターとして教員3名がレギュラー参加、参加学生は社会科学全学生・大学院生の中からハードな二泊三日の講習合宿に耐えることができる傑物学生12名を選抜して実施しています。

1982年、全クラス・ゼミ参加による第一回社会科学祭が挙行されました。このイベントを立ち上げるために、それまでのオリエンテーション委員会や編集委員会などの組織が統合されて「社会科学学生委員会」が発足しました。学科祭では、創設から10有余年の歩みをインタビューとナレーションで構成したスライド「社会科学の足跡」が公開上映され、またゼミ創作のミニ演劇やディベートコンテストなど、ゼミごとに工夫した出し物が新装なった学生会館の舞台上で上演されました。その後、学生委員会は、機関誌「ゲメインシャフト」を創刊し、学科の教育と研究に寄与してきました。

・2003年度の「特色ある教育」(文部科学省補助金対象事業)

社会学科における「特色ある教育」事業は、フィールドワーク、実習プロジェクト、講演会、の三部門から構成されています。次に部門ごとに今年度の取り組みについて報告します。

フィールドワーク

A. 矢谷慈国教授担当「人間学フィールドワーク」

大学の門前近辺に地元の農家より借用している「実習田」「実習畑」があります。田んぼでは春に田植え、夏に草取り、秋に刈り取りの体験学習を行ないました。畑では、種まきを行い、春に「野草を食う会」、秋に収穫物を料理して「芋煮会」を開催しました。種を蒔き、手入れをし、収穫物を料理し、共に味わうという一連の体験を通して、人間の命が自然環境と生物によって支えられていることを実感し、その収穫物に感謝し、共に喜ぶという体験が得られればよとしています。

B. 釘田寿一講師担当「社会学フィールドワーク(B)」

授業で雑誌の編集作業について学習した後、出版社を訪問し、編集作業の実態を見学しました。

実習プロジェクト

A. 矢谷慈国教授担当、教育キャンプ「何もない山の中で食寝遊、而して学ぶ」

実施期間：2003年8月1日～4日

場 所：分尾キャンプ場

参 加 者：教員3名(矢谷教授,他2名),学生21名

このプロジェクトは、既に述べた(1975年)に実施されたKJ法移動大学をルーツとし、場所も同じ分尾キャンプ場です。参加者は、キャンプ場としての施設らしい施設が敢えてない、その意味で何もない山の廃村の中で三泊四日の共同生活を営みます。食料は、山道を手分けして運び、到着すると時計を集めて一括管理し、時計にしばられない共同生活の原体験が始まります。最初にしなければならないことはトイレ作り、食事づくり。今年は近隣から購入した生きたニワトリを3羽絞めて食べました。生きたニワトリが絶命して食料となる過程をつぶさに見届けました。このキャンプで近年定番となっているプログラムは「杉の枝打ち」作業です。近くの山に植林された杉の枝打ち作業に参加し、林業の厳しさを体験しました。約10メートルの杉に登って枝を打つ作業は、危険ではありますが、「自分のいのちは自分で守れ」というキャンプ・リーダー矢谷教授の薫陶を受けて木に登った学生から未だ怪我人を出したことはありません。

B. 讃岐うどん手打ち体験

実施期間：2003年10月31日～11月1日

場 所：香川県高松市近辺

参 加 者：教員1名(山本博史教授),学生5名

人間学部社会科学の取り組み

本場の讃岐うどん店の中でもうまいという評判の店をピックアップし、店の独自性と讃岐うどんの共通性を比較吟味しました。更に讃岐のうどん文化を支える手打ちの技の実習に挑戦しました。うどんの味覚に対する地域の人々の厳しい評価が手打ちの技法を練磨させていることが分かりました。

C. さかさま大学 K J 2004

実施期間：2004年3月20日～22日

場 所：滋賀県甲賀郡水口町 グリーンヒル・サントピア

参 加 者：教員3名（吉田・加村・島本教授）、学生12名

学生が、教える側と教えられる側という、いわば上下の関係を前提としている限り、学生は依存し本来のあるべき大学における地位を獲得することができません。この合宿では、その関係をさかさまにして、学生が指導者の地位に立って自主的に運営します。学生は教員の役割を取って講義（作品の発表）の準備をしなければなりませんし、教員は学生の役割を取ってシビアな質問を投げかけ、白熱した対話の中からユニークな発想が生まれ、それが図解作品として提示されました。

講演会（2003年度は「日本の食文化」をテーマにした）

A. 2003年10月15日

小泉武夫（東京農業大学教授） 演題「食みだれて民族ほろぶ」

B. 2003年12月5日

熊倉功夫（国立民俗学博物館教授） 演題「日本文化と茶の湯」

. その他の特色ある教育への取り組み

イ. 日野謙一講師担当「社会学フィールドワーク（C）」

昨年より、茨木市の総合的な地域調査を数年かけて実施する企画を立て、まずは取り組みやすいところから聞き取り調査や文献調べをして、脚で歩き、バスで遠出をしたりして集めた情報をデータベース化しつつあります。今年もその活動を継続して行い、グループごとにテーマを決めて聞き取り調査に出かけました。その結果を報告集『フィールドワークの理論と実践：茨木市とその周辺を調べる』にまとめました。それは、指導教員と学生の協力と努力の結実として輝いています。

ロ. 吉田正教授、学生歌壇『日々あらたに集』第8号出版

この歌集は、1996年12月に創刊されて以来、今年度で第8号の出版となりました。毎年度末の最終授業（1月）のときに学生に配布できるよう、冬休みに編集作業が進められます。歌集掲載の短歌は、吉田教授の担当科目（現代社会と人権・人権論特講・教育社会学・表現演習など）

の受講生がレポートとして『日々あらたに集』に投稿するという仕方でも提出された作品です。同教授によれば、学問の概念的知識は人々の相互主観的（いわゆる客観的）意識に支持されて成立していますが、短歌は個々人の主観的な感情・感動の体験への気づき、そのように生きた自分への気づきの表現であり、自己が自己を対象化して捉えて主体性を形成する営みであり、それが言葉に表現されることによって、他者から共感共鳴の支持が与えられ、相互主観的な関係が生まれるところに社会が成立するといえます。短歌会の体験は、主観的なものが相互主観的なものへ移行する、まさに社会が生まれようとするプロセスを味わうことを意味します。受講生は、短歌を作る意味を理解した上でプライベートな感情的世界をも短歌の形式に整形することによって芸術化し、自らを表現する勇気を獲得していきます。

八．人間学部主催特別講演会

日 時 2003年12月2日

講 師 河口正史（本学人間学部客員教授）

演 題 「チャレンジ」

講師の河口正史氏は、アメリカンフットボールの選手として、大学や社会人リーグで活躍し、現在、「NFL（米ナショナル・フットボール・リーグ）に最も近い男」といわれている方です。アメリカンフットボールの本場でプロ選手になろうと挑戦し続ける河口氏に真の「チャレンジ精神」とはどのようなものかを語っていただきました。

・今後の「特色ある教育」～これからどうする～

社会学科にユニーク・プロジェクトが輩出した時期は、1985年から1990年までの5年間でした。なぜこの時点で高揚期が突然に終わったのでしょうか。その理由は明快です。実習プロジェクトに配当されてきた学科予算が半分以上に削られたからです。それまで、社会学科の実習プロジェクトは社会学科のみが行なってきた、まさに特色ある教育事業でありましたが、大学執行部は1994年から同様のプロジェクトの実施を学内の全学科に認め、その予算配分の基準は「学生一人当たり1万円」とされました。そのために、例えば経済学部では300万円以上の新規事業を企画しなければならなくなり、社会学科では百数十万円の予算で「実習プロジェクト」だけでなく、授業科目の「フィールドワーク」や「社会学特殊講義」などで野外実習に行く場合の経費をもまかなわなければならなくなったのです。この予算措置の変更が、社会学科の実習プロジェクトを直接につぶすキッカケにはなりましたが、今から思えば既にその時点から、教員が考えたプロジェクトに学生を動員して連れていくという、遠足スタイルの方式は、教員からも学生からも離れつつあったような気がします。その理由は、実習プロジェクトは、オプションの教育活動であり、毎年行なうことは荷重負担になること、新学部の開設によって教員は新たな科目を担当したり、多くの会議に参加しなければならなくなり、通常の授業だけで手一杯になっていたこ

と、遠足スタイルのプロジェクトでは学生の主体的参加を期待できないこと、社会学的思考と行動を積極的に身に付けようとする学生が少なくなってきたこと、などであろう。

結局、その後に残って現在に至っている息の長いプロジェクトは、「山の中で食寝遊、而して学」(矢谷)と「さかさま大学K」2004」(吉田・山本・加村)のみとなりました。これら二つのプロジェクトだけがなぜ残ったか。その理由をここで検討しておくことは、今後のプロジェクトのあり方を考える上で重要であると思われます。理由はいくつか考えられますが、まず他のプロジェクトがなくなったために予算配分を受けることができたこと、教員が好きでやっていること、学生は参加のための事前研修を必要とせず学年を問わず誰でもプロジェクトに参加できること、参加者の一人ひとりに短期決戦を渾身の努力で切り抜けることが要請されること、などです。例えば、前者は、学生のサバイバル能力が試され、自ら感じ考え工夫する能力が問われ、後者は、発想力・構想力・セルフプレゼンテーションの能力をフルに発揮しなければ切り抜けられません。

これら二つのプロジェクトが生き残った理由を参考にして、今後のプロジェクトは設定される必要があります。もはや教員が考案した大きなプロジェクトに学生を参加させるという方式の時代でないならば、どのようなプロジェクトが時代にマッチしていくか、十分に検討した上で設定されねばなりません。一つ提案すれば、教員のプロジェクトがダメならば、小さくても多様なプロジェクトを学生自身が立ち上げるプロジェクトが考えられます。そのためには、学生の活動を援助するためのハードの施設やソフトのノウハウを整備する必要があります。例えば、学生が立ち上げたいと思うプロジェクトをデータベース化して、それらを調整してグループ化したり、そのための能力開発、例えばモノづくりのための身体技法の訓練や交渉能力向上のための話術の講習など、そのための相談員と相談室を設けたりする必要があります。また、その実践結果を評価して単位化したりすることも考えられます。そして今後の課題は、教員に対して、意欲をもった学生だけを対象にするのではなく、学科の全ての学生が、このプログラムに参加できるように、あらゆる能力を開発する工夫と努力が要請されます。